



一貫コース通信

夏の甲子園を通して考え伝えたいこと

第105回全国高等学校野球選手権記念大会が8月23日に閉幕した。酷暑著しい今夏、球児の健康面、安全面に配慮しクーリングタイムが設定され、また今春のセンバツ高校野球からは10回からの延長タイブレーク制度が設けられるなど、健康面、安全面で配慮されたことは記憶に新しい。球児たちのこれまでの取組みが結実する集大成の場として相応しく、そして球児の未来の活躍のために、これまでの伝統を大切にしながら、時代の流れや環境の変化に柔軟に対応された大会であった。

さて、厳しい地方予選を勝ち上がり、互いに実力が肉薄したチーム同士が、これまでの鍛練に裏打ちされたプレーの数々を披露しながら、投打にそして攻守にと躍動し、一進一退の攻防を繰り広げる真剣勝負と、互いの健闘を讃え合うスポーツマンシップは、高校野球ファンだけに留まらず毎年多くの人々を魅了している。

投手は、与えられたレギュレーションであるピッチャープレートの幅とホームベースの幅を活用し左右の幅と、上下の幅を最大限に使い、多彩な球種にスピードの緩急をつけることで、打者のタイミングを外し三振や凡打の山を積み上げる。また、一般的には投球フォームを変えずに多彩な球種を投げ分けることで、打者は球種が見極め難くなるのだが、今大会では敢えて1球ごとに投球フォームを変えタイミングを外す投手も現れるなど、個々の長所を生かす型にはまらない指導も興味深かった。

捕手は、打者をよく分析し、強み、弱みを個別に理解した上で、配球の指示はもちろん、守備位置の変更や守備のサインを送る。強肩であり、盗塁を狙う走者の一瞬の間も見逃さず正確な牽制球を送るなど、酷暑の中でも常に高い集中力と注意力で試合運びを牽引する守備の要である。

一方打者はボールを強く弾き、より遠くへ飛ばすために体幹が鍛えられている。そして、投手をよく分析し、狙い球を予め決めて打席に立つ。そして、一投一投を見極め、狙い球や失投である甘い球を見逃さずに振り抜き、安打を生み出す。通常投手の渾身の一球は、三振また凡打となる場合が多い。しかし、ときにフラフラフラ…と上がった打球が強風に煽られ、打球を追う3人の野手のちょうど真ん中に落下し安打となることがある。普段なら守備範囲内という打ち取った打球が、「打者の気持ちに球に乗る」という言葉があるように、野手の頭上をわずかに超え安打となる。投手からしてみれば打ち取ったのに安打となり、失点に絡む最悪の場面になることがある。これは投手として報われない瞬間となり、打者としては歓喜の瞬間となる。これは「勝負の神様のいたずら」というしかない。しかし、そのような時、全員が笑顔で励まし、それに笑顔で応えようとする投手の姿は高校野球を象徴する名場面である。ときに、ピンチを乗り越え「よっしゃー」というガッツポーズをしてベンチに戻る姿は、努力が結実した瞬間であり、この上ない自信に繋がることだろう。

また野球では不思議な言葉がある。1つ目は「野球は2アウトから…」という言葉だ。意外に得点シーンは2アウトからが多いということである。2つ目は「満塁は得点が入りにくい」だ。ノーアウト満塁や1アウト満塁などの絶体絶命のピンチを無失点で切り抜ける場

面も意外に多いのだ。こんなピンチやチャンスの場面は球児たちが好き好んで作れるものではない。その場面では球児たちの揺れ動く表情、気持ちが行動に現れ、守る方も打つ方もチームとしての真価が問われる、一球一球が見逃せない筋書きのないドラマとなる。

昨今は全国的に高校野球のレベルが上がっており、互いに拮抗したチーム同士の対戦になることが多い。そのため「試合の流れ（チャンスとピンチ）の往来」をどうものにできるかという点も見逃せない。そして「チャンスを掴む力」、「ピンチを凌ぐ力」そして「僅かばかりの運（因果関係のわからない）」が試合を左右するよう感じる。どちらに勝敗が傾くかは終わるまでわからないが、勝負どころの失策がその要因となることがある。守備の名手と言われる選手が失策してしまうこともある。人間のすることだからこればかりは致し方ないのであるが、人生には「なぜ今なんだ」ということがあるのだ。努力しても、報われない瞬間がある。それを今後回避するには何が必要なのだろう。どうすれば回避できたのだろうと考えてしまう。きっと答えは人それぞれなのだろう。

話は変わるが、甲子園出場校の球児たちは人間的魅力を備えている人が多い。野球だけでなく勉強も、人間的成長にも真剣に取り組んでいる。つまり監督、コーチは野球の技術指導はもちろんだが、これからの長い人生を有意義なものにできるように「野球を通して人間教育」をしているのだ。人として徳を積み、内面を磨けば、これまで見えないものが見えてくるのだ。例えば、見えなかった卑怯でズルい自分の姿も然りである。それに気が付き、正そうとし努力することが大きな成長につながる。言行一致しないリーダーに、多感な時期の高校生をまとめることは至難の業である。また年代的には好き嫌いの分別も明確で、損得勘定にも長ける年代である。とかく私達は厳しい練習や指導について「好きな事だからやれるだろう」という何とも安易で都合の良い考えになりがちだが、「1つの物事に真剣に取り組む成果を上げる」という事を考えれば、どんなことでさえ、そんなに容易いことではないのだ。ましてや高校野球ともなれば尚更である。そこには人生を掛けた真剣勝負の日々の積み重ねがあるのだ。そして、リーダーが生まれるのである。優れた球児は高校生という年代に関係なく、大人以上に心に響く言葉を発し、その言葉には人を感動させる力がある。また、自律しており、人間的に魅力に富んで立派である。そのように高校野球が一人ひとりの球児を成長させているのだ（これは桃李の精神の体現者の育成に通じると感じている）。だからこそ、勝敗がつくのは残念だが、球児が人生をかけて紡いできた成長の証が人々を感動させ、土埃にまみれて一生懸命プレーする姿、仲間を鼓舞し励ます姿、鍛錬が実を結ぶファインプレーの数々、そして人目を憚らず感涙する姿は私達に「物事に真剣に取り組む事の素晴らしさ」を分かりやすく教えてくれる。そして、その姿は「格好いいし、素敵だし、美しい」のである。

最後になるが、合宿最終日に所員の方からいただいた講評の中に「真剣に物事に取り組んでいる人の姿は輝いて見える」とお話しいただいた。私はとても嬉しかったし、生徒諸君を誇らしく思った。あれから早1カ月。酷暑続きの夏から秋の足音が静かに聞こえだし、季節の移り変わりを五感で感じられるようになった。今回は生徒諸君に今伝えたいことを、高校野球という題材を通して間接的に書き綴った。私が生徒諸君に伝えたい事は何であったのか、一人ひとりその意を汲んでみてほしい。きっと、意の汲み取り方には相違があるだろうが、個人差があってもいいと私は思う。生徒諸君には今汲み取れることを精一杯感じ取り、個々の成長のきっかけにしてくれれば大変嬉しい。

創立110周年という記念すべき年に在籍し同じ学び舎で学ぶ同志として、この後半戦、前を向いて一丸となって力強く進み、未来への大きな推進力を育んでいこう。